様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２４年　６月　８日現在

機関番号：８２７２３
研究種目：基礎研究（Ｃ）
研究期間：2009　～2011
課題番号：２１５３０１４２
研究課題名（和文）　ポスト・リベラリズム時代における規範理論の役割――その現実的適用を目指して

研究課題名（英文）　The role of a normative theory in the time of post-liberalism

研究代表者　有賀誠
（ARIGA MAKOTO）
防衛大学校・人文社会科学群・教授
研究者番号：90531765

研究成果の概要（和文）：冷戦体制の終焉は、リベラル・デモクラシーの勝利と意味づけられたが、その最終イデオロギーと見なされたリベラル・デモクラシーも様々な問題を抱えていることが、明らかになった。より具体的には、研究会を通じて、戦争概念の変化、貧困国の問題、宗教の復権、ナショナリズムの復権等、グローバリゼーションの進展の中で、それに対する一種のバックラッシュとして生み出されている諸問題を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：End of the cold war was considered to be a victory of liberal democracy. However, we found that liberal democracy has many problems. More specifically, we clarified the change of a concept of war, the problem of poor countries, and the restoration of religion and nationalism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,600,000	270,000	1,870,000
2010 年度	1,400,000	306,000	1,706,000
2011 年度	500,000	67,800	567,800
年度			
総　計	3,500,000	643,800	4,143,800

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：政治学・政治学
キーワード：リベラリズム、ポスト・モダニズム、ナショナリズム、平和主義、正戦論

１．研究開始当初の背景

一般に、冷戦体制の終焉は、リベラル・デモクラシーの勝利と意味づけられることが多い。しかし、冷戦終焉後、数十年を経て、最終イデオロギーと目されたリベラル・デモクラシーにも大きな綻びが現れている。

他方、1970 年に発表されたＪ・ロールズの『正義論』を起爆剤として、規範理論は目覚ましい進展を遂げてきた。これは、社会科学の進展における重要な転換を印づけるものである。というのも、20 世紀の社会諸科学においては、事実の解明を主要な課題とする実証主義が主導権を握り、価値や規範に関する研究は、傍流に位置づけられるか、非科学として斥けられる傾向にあったからである。

この二つの流れは、どのように交錯するのだろうか。本研究は、リベラル・デモクラシーの再検討という時代背景の中で、規範理論がどのような貢献をなすことができるのかを考えていこうとするものである。

２．研究の目的

上記のような時代背景の下で、本研究は、現代を「ポスト・リベラリズム」の時代と特徴づけ、リベラリズムに対抗する様々な規範理論の現代的な展開をフォローし、検討しよ

うとすることを目的とする。
　その際、特に留意したい点は、単に特定の価値を提示し、その妥当性を抽象的に証明しようとするのではなく、価値や理念と現実問題との関係にも目配りした研究を行うことである。
　実際、価値や理念と現実問題との関係に目配りした研究も陸続と現れつつある。例えば、世界の貧困の問題、環境と生命の倫理、公正な税制、戦争をめぐる正義といったテーマを論じる諸研究が代表的なものであろう。
　本研究は、このような思想動向を踏まえ、規範理論の現実的な有効性にも目配りをしつつ、現実社会の諸問題に具体的な処方箋を提供しうるようなかたちで、価値や理念の研究を進めようとするものである。
　より具体的に言えば、リベラルなナショナリズム、環境と動物に関する倫理学、多文化主義の政治哲学、コスモポリタンなグローバル倫理学、正戦論、平和主義といった諸領域が、特に「ポスト・リベラリズム」の時代において重要な地殻変動が現れているとともに、現実的な処方箋を必要としている諸領域と考えることができ、本研究における主要な検討の対象となる。

３．研究の方法

　上記のようなアクチュアルな問題と規範理論との連関を図ろうとするような研究課題は、とても一人の研究者が扱うことのできるものではない。
　そこで、本研究では、研究目的を達成するために、社会科学の諸分野で規範理論研究に携わっている研究者を組織することにした。
　さらに、ほぼ毎月、研究会を開催し、研究分担者、連帯研究者による報告と報告内容に関する長時間に及ぶ討論を行った。
　また、研究分担者だけではフォローが難しい領域に関しては、積極的に外部からゲスト・スピーカーを呼び、その知見を学ぶようにした。

４．研究成果
　最終的に、研究分担者を中心に『グローバル社会と現代規範理論１――新たな問題群――』、『グローバル社会と現代規範理論２――主体と空間の変容――』と題した二巻本を研究成果として世に問う予定である。出版社もすでに決まっており、来年度中には、完成稿を得るという日程で、現在、準備を進めている。
　各巻の構成と執筆予定者を以下に記しておく。

第一巻　グローバル社会と現代規範理論１――新たな問題群――
序（第二巻と共通）伊藤恭彦（名古屋市立大学）
序章　有賀誠（防衛大学校）
第一部　戦争と平和
第一章　テロリズムと正戦論　有賀誠（防衛大学校）
第二章　介入の正義　谷本晴樹（財団法人尾崎行雄記念財団研究員）
第三章　平和主義の現在　松元雅和（島根大学）
第二部　グローバル市場
第一章　自由貿易と保護貿易の規範理論　武藤功（防衛大学校）
第二章　グローバルな分配的正義　伊藤恭彦（名古屋市立大学）
第三章　グローバルな正義と難民・外国人　浦山聖子（東京大学　日本学術振興会）
第三部　リスク・環境・生命
第一章　リスク社会と規範　佐野亘（京都大学）
第二章　環境とグローバリゼーション　田上孝一（立正大学）
第三章　生命倫理と正義　板井広明（東京大学）

第二巻　グローバル社会と現代規範理論２――主体と空間の変容――
序（第一巻と共通）　伊藤恭彦（名古屋市立大学）
序章　松井暁（専修大学）
第四部　主体、関係、アイデンティティの変容
第一章　ジェンダーと家族　坂口緑（明治学院大学）
第二章　民族とシティズンシップ　蓮見二郎（九州大学）
第三章　グローバリゼーションと宗教対立　藤本龍児（同志社大学）
第五部　政治空間の変質
第一章　国民国家の規範的位相　施光恒（九州大学）
第二章　グローバリゼーションと共同体　菊池理夫（南山大学）
第三章　グローバル・ガヴァナンス・世界政府　山崎望（駒澤大学）
第六部　展望
第一章　帝国の暴力を越えて　向山恭一（新潟大学）
第二章　資本の文明化作用と社会主義　松井暁（専修大学）
第三章　抵抗の社会運動　五野井郁夫（高千穂大学）

　また以下に具体例を示すように、各年度ごとに研究分担者たちは、精力的に論文の公刊や学会発表を行っており、それらの成果への

反響も少なくない。
　さらに公開のかたちで続けてきた研究会も、少しずつ認知されてきており、現在では、若手研究者を中心に常時二十名を超える研究者の参加者をみている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１７件）

① 松元雅和、平和主義の実践的可能性、『実践する政治哲学』、査読無、2012、119-144、
② 伊藤恭彦、平等・労働・グローバルな正義、哲学と現代、査読無、27 巻、2012、43-59、
③ 松元雅和、分析的政治哲学の系譜学、法学研究、査読有、84 巻、2011、35-68、
④ 松井暁、マルクスと自由、専修経済学論集、査読無、46 巻、2011、49-82、
⑤ 坂口緑、デンマーク・ボランタリーセクターの現在――「共同責任」と「生活の質」――、研究所年報、査読無、41 巻、2011、47-63、
⑥ 施光恒、「開国」論議の闇と日本人の自由、『表現者』、査読無、36 巻、2011、96-99、
⑦ 伊藤恭彦、アメリカの正義と地球の正義、『人権』、査読無、21 巻、2011、25-31、
⑧ 施光恒、戦後民主主義という逆説、『表現者』、査読無、30 巻、2010、18-122、
⑨ 施光恒、ボーダレス世界を疑う――「国作り」という観点の再評価、『成長なき時代の「国家」を構想する』、査読無、2010、309-327、
⑩ 坂口緑、学習社会と「個人化」――ヨーロッパにおける生涯学習研究の動向、生涯学習・社会教育研究ジャーナル、査読有、3 巻、2010、1-24、
⑪ 武藤功、M・フリードマンの経済哲学――その意義と限界――、『経営思想研究への討究』、査読無、2010、57-74、
⑫ 松井暁、疎外論と正義論、専修経済学論集、査読無、44 巻、2010、133-158、
⑬ 松井暁、マルクスと平等主義、専修経済学論集、査読無、45 巻、2010、17-42、
⑭ 施光恒、リベラル・デモクラシーとナショナリティ、『ナショナリズムの政治学』、査読無、2009、66-88、
⑮ 松元雅和、多文化主義とナショナリズム、『ナショナリズムの政治学』、査読無、2009、106-125、
⑯ 施光恒、日本の人権教育の効果的な形態の探求――文化的資源の活用という観点から――、『政治における「型」の研究』、査読無、2009、245-270、
⑰ 松井暁、マルクスとコミュニタリアニズム、専修経済学論集、査読無、43 巻、2009、61-103、

〔学会発表〕（計４件）

① 施光恒、ボーダレス世界を疑う――近代文明の成立と「翻訳」の役割――、比較文明学会、2011 年 4 月 9 日、西南学院大学（福岡県）
② 有賀誠、コミュニタリアンの正戦論？――M・ウォルツァーの場合――、2010 年 10 月 10 日、日本政治学会、中京大学（愛知県）
③ 伊藤恭彦、グローバリゼーション・リベラリズム・周縁化、政治思想学会、2009 年 5 月 29 日、青山学院大学（東京都）
④ 松元雅和、ウォルツァーの人道的介入論とその展開、日本政治学会、2009 年 10 月 10 日、日本大学（東京都）

〔図書〕（計２件）
① 伊藤恭彦、ブックガイドシリーズ基本の 30 冊政治哲学、人文書院、2012 年、197 頁、
② 伊藤恭彦、貧困の放置は罪なのか――グローバルな正義とコスモポリタニズム――、人文書院、2010 年、298 頁、

６．研究組織
(1)研究代表者
有賀　誠（ARIGA MAKOTO）
防衛大学校・人文社会科学群・教授
研究者番号：９０５３１７６５

(2)研究分担者
伊藤　恭彦（ITOH　YASUHIKO）
名古屋市立大学大学院・人間文化研究科・教授
研究者番号：３０２２３１９２
松井　暁（MATSUI SATOSHI）
専修大学・経済学部・教授
研究者番号：９０２３８９３１
松元　雅和（MATSUMOTO MASAKAZU）
島根大学・教育学部。准教授
研究者番号：００５２８９２９
向山　恭一（SAKIYAMA KYOUICHI）
新潟大学・人文社会教育科学系・准教授
研究者番号：１０２３５２０２
施　光恒（SE TERUHISA）
九州大学大学院・比較社会文化研究院・准教授
研究者番号：７０３７２７５３
坂口　緑（SAKAGUCHI MIDORI）
明治学院大学・社会学部・准教授
研究者番号：１０３３９５７５

(3)連携研究者

武藤　功（MTHO ISAO）
防衛大学校・人文社会科学群・教授
研究者番号：